

雪靈統記

泉鏡花

青空文庫

機会がおのずから来ました。

今度の旅は、一体はじめは、仲仙道線で故郷へ着いて、そこで、

一あるよう事を済すましたあとを、姫路行の汽車で東京へ帰ろうとしたので

ありました。——この列車は、米まいばら原で一体分身して、分れて東

西へ馳はしります。

それが大雪のために進行が続けられなくなつて、晩方武生たけふ駅

(越えちぜん前)へ留つたのです。強いて一町場ひとちょうばぐらいは前進出来な

い事はない。が、そうすると、深山の小駅ですから、旅舎にも食

料にも、乗客に対する設備が不足で、危険であるからとの事でありました。

元来——帰途にこの線をたよつて東海道へ大廻りをしようとしたのは、……実は途中で決心が出来たら、武生へ降りて許されないう事ながら、そこから虎杖いたどりの里に、もとの蔦屋つたや（旅館）のお米よねさんを訪ねようという……見る見る積る雪の中に、淡雪の消えるような、あだなのぞみがあつたのです。でその望のぞみを煽あおるために、もう福井あたりから酒さえ飲んだのでありますが、酔いもしなければ、心も定きまらないのでありました。

ただ一夜、徒いたずらに、思出の武生の町に宿つても構わない。が、宿りつつ、そこに虎杖の里を彼方かなたに視みて、心も足も運べない時の

夢はかなさにはなお堪えられまい、と思いなやんでいますうちに——

汽車は着きました。

目をつむつて、耳をおさえて、発車を待つのが、三分、五分、十分十五分——やや三十分過ぎて、やがて、駅員にその不通の通達を聞いた時は！

雪がそのままの待女郎まちじよろうになつて、手を取つて導くようで、ま
んじ巴ともえの中なかぞら空を渡る橋は、さながらに玉の棧橋かけはしかと思われま
した。

人間は増長します。——積雪のために汽車が留つて難儀をする
と言えは——旅籠はたごは取らないで、すぐにお米さんの許もとへ、そうだ、
行つて行ゆけなそんな事はない、が、しかし……と、そんな事を思

つて、早や壁も天井も雪の空のようになった停車場ステエシヨンに、しばらく考えていましたが、余り不躰ぶしつけだと己おのれを制して、やつぱり一旦は宿に着く事にしましたのです。ですから、同列車の乗客うちの中で、停車場ステエシヨンを離れたのは、多分私が一番あとだったろうと思いません。

大雪です。

「雪やこんこ、

あられ

霰あられやこんこ。」

大雪です——が、停車場ステエシヨン前の茶店では、まだ小児たちの、そんな声が聞えていました。その時分は、山の根笹を吹くように、風もさらさらと鳴りましたつけ。町へ入るまでに日もとつぷりと

暮果てますと、

「爺じいさいのウ婆ばばさいのウ、

綿雪小雪が降るわいのウ、

雨炉も小窓もしめさっし。」

と寂わびしい侘わびしい唄うたの声——雪も、小児こどもが爺じい婆ばあに化まけました。

——風も次第に、ごうごうと樹ながら山を揺ゆりました。

店屋さえもう戸しまが閉しまる。……旅籠屋も門とぎを閉しまりました。

家名いえなも何も構かわらず、いまそこも閉しまめようとする一軒の旅籠屋へ

駈かけ込みましたのですから、場所は町まちの目貫めぬきの向むけは遠とほいけれど、

鎮守の方へは近ちかかったのです。

座敷は二階で、だだっ広い、人気の少ないさみしい家で、夕餉ゆうげ

もさびしゆうございました。

わかさがれい

若狭鰈——大すきですが、それが附木つけぎのように凍っています

しらすぼし

白子魚乾、切干大根きりぼしだいこんの酢、椀はまた白子魚乾に、とろろ

昆布の吸もの——しかし、何となく可なつかし懐くつて涙ぐまるるよう
でした、なぜですか。……

酒も呼んだが酔いませぬ。むかしの事を考えると、病苦を救わ
れたお米さんに対して、生意気らしく恥かしい。

両手を炬燵こたつにさして、俯向うつむいていました、濡れるように涙が出
ます。

さつという吹雪であります。さつと吹くあとを、ごうーと鳴る。
……次第に家ごと揺るゆすほどになりましたのに、何という寂さび寞しさだ

か、あの、ひっそりと障子の鳴る音。カタカタカタ、白い魔が忍んで来る、雪入道が透見^{すきみ}する。カタカタカタカタ、さーッ、さーッ、ごうごうと吹くなかに——見る見るうちに障子の棧^{すき}がパツパツと白くなります、雨戸の隙^{すき}へ鳥の嘴^{くちばし}程吹込む雪です。

「大雪の降る夜^よなど、町の路^{みち}が絶えますと、三日も四日も私一人——」
三年以前に逢^あった時、……お米さんが言ったのです。

……………

「路の絶える。大雪の夜^よ。」

お米さんが、あの虎杖の里の、この吹雪に……

「……ただ一人。」——

私は決然として、身ごしらえをしたのであります。

「電報を——」

と言つて、旅宿を出ました。

実はなくなりました父が、その危篤きとくの時、東京から帰りますの
に、（タダイマココマデキマシタ）とこの町から発信した……偶
とそれを口実に——時間は遅くはありませんが、目口もあかない、
この吹雪に、何と言つて外へ出ようと、放火つげびか強盗、人殺ひところしに
疑われはしまいかと危あやぶむまでに、さんざん思い惑まどつたあとです。
ころ柿のような髪を結つた霜げた女中が、雑炊ぞうすいでもするので
しよう——土間で大釜おおがまの下を焚たいていました。番頭は帳場に青
い顔をしていました。が、無論、自分たちがその使つかいに出ようとは

怪我にも言わないのでありました。

二

「どうなるのだろうか……とにかくこれは尋常事じゃない。」

私は幾度となく雪に転び、風に倒れながら思ったのであります。

「天狗の為す業だ、——魔の業だ。」

何しろ可恐い大な手が、白い指紋の大渦を巻いているのだと思いました。

いのちとりの吹雪の中に——

最後に倒れたのは一つの雪の丘です。——そうは言っても、高い場所に雪が積つたものではありません、粉雪の吹溜りがこんもりと積つたのを、哄と吹く風が根こそぎにその吹く方へ吹飛ばして運ぶのであります。一つ二つの数ではない。波の重るような、幾つも幾つもの、颯と吹いて、むらむらと位置を乱して、八方へ高くなります。

私はもう、それまでに、幾度もその渦にくると巻かれて、いくたび大なる水の輪に、おおき子子虫が引くりかえるような形で、取つては投げられ、掴んで倒され、捲き上げては倒されました。

私は——白昼、北海の荒波の上で起る処のこの吹雪の渦を見た事があります。——一度は、たとえば、敦賀湾でありました——

絵にかいた雨あまりよう 竜のぐるぐると輪を巻いて、ひとすじ 一条、ゆつたりと尾を下に垂れたような形のもが、降りしきり、吹ふき煽あおつて空中に薄黒い列を造ります。

見ているうちに、その一つが、ぱつと消えるかと思うと、たちまち、ぽつと、続いて同じ形があらわ顕れます。消えるのではない、かすか幽かすに見える若狭わかさの岬へ矢のごとく白くなって飛ぶのです。一つ一つがみなそうでした。——吹雪の渦は湧わいては飛び、湧わいては飛びます。

私の耳を打ち、鼻をね振じつつ、いま、その渦が乗つては飛び、掠かすめては走るんです。

大波に漂う小舟は、宙天に揺ゆ上あらるる時は、ただ波ばかり、

白き黒き雲の一片をも見ず、奈落に揉落もみおとさるる時は、海底いわの巖の根なる藻の、紅あかき碧あおきをさえ見ると言います。

風の一息死ぬ、真空の一瞬時には、町も、屋根も、軒下の流ながれも、その屋根を圧して果しなく十重とえはたえ二十重とえはたえに高く聳たち、遙はるかに連る雪の山脈も、旅籠はたごの炬燵こたつも、釜かまも、釜の下なる火も、果はては虎杖の家、お米さんの薄色の袖、紫陽花あじさい、紫の花も……お米さんの素足さえ、きつぱりと見えました。が、脈を打って吹雪が来ると、呼吸むせは咽むせんで、目は盲めしいのようになるのでありました。

最早もはや、最後かと思う時に、鎮守やしろの社が目の前まへにあることに心着いたのであります。同時に峰とがの尖とがつたような真ま白しろな杉の大木を見ました。

雪難之碑のある処——

天狗——魔の手など意識しましたのは、その樹のせいかも知れません。ただしこれにめじるし目標が出来たためか、背に根が生えたようになって、倒れている雪の丘の飛移るような思いはなくなりました。

まことは、両側にまだ家のありました頃は、——中に旅籠も交まじっています——一面識はなくつても、同じ汽車に乗った人たちが、まぼら疎にも、それぞれの二階に籠こもっているらしい、それこそ親友が附添つっているように、氣丈夫に頼母たのもしかつたのであります。もつともそれを心あてに、頼む。——助けて——助けて——と幾いくたび度か呼びました。けれども、窓一つ、ちらりと燈とも火の影の漏れて答

うる光もありませんでした。聞える筈はずもありません。

いまは、ただお米さんと、間に千尺の雪を隔つるのみで、一人死を待つ、……むしろ目を瞑ねむるばかりになりました。

時に不思議なものを見ました——底そこひなき雪の大空の、なおその上を、プスリと鑿のみで穿うがつてその穴から落ちこぼれる……大きさはそうです……蠟燭ろうそくの灯の少し大いほどな真ま蒼さおな光が、ちらちらと雪を染め、染めて、ちらちらと染めながら、ツツと輝いて、その古杉こずえの梢こずえに来て留りました。その青い火は、しかし私の魂たまがもう藻脱もけて、虚空へ飛んで、倒さかさまに下の亡骸なきがらを覗のぞいたのかも知れませんか。

が、その影さが映さすと、半ば埋うもれた私の身体からだは、ぱつと紫陽花に

包まれたように、青く、藍あゐに、群ぐんじよう青せいになりました。

この山の上なる峠の茶屋を思い出す——極暑、病気のため、俾くるまで越えて、故郷へ帰る道すがら、その茶屋で休んだ時の事です。門も背戸も紫陽花で包まれていました。——私の顔の色も同じだつたろうと思う、手も青い。

何より、嫌な、可おそろし恐おそい雷が鳴つたのです。たださえ破われようとする心臓に、動悸どうきは、破障子やれしやうじの煽あおるようで、震える手に飲む水の、水より前さきに無数の蚊が、目、口、鼻へ飛込んだのであります。

その時の苦しさ。——今も。

三

白い梢の青い火は、また中空なかぞらの渦を映し出す——とぐるを巻き、尾を垂れて、海原のそれと同じです。いや、それよりも、峠で尾根に近かった、あの可おそろし恐い雲の峰にそっくりであります。

この上、雷。

大雷は雪国の、こんな時に起ります。

死力を籠こめて、起上ろうとすると、その渦が、風で、ごうと巻いて、捲まきながら乱ると見れば、計はかりし知られぬ高さから颯さっと大滝を揺ゆりおと落すように、泡沫あわとも、しぶきとも、粉とも、灰とも、針とも分かず、降ふりうず埋める。

「あつ。」

私はまた倒れました。

怪火あやしびに映る、その大滝の雪は、目の前なる、ズツンと重い、

大な山おおきの頂から一雪崩ひとなだれに落ちて来るようにも見えました。

引挫ひっしがれた。

苦痛の顔の、醜さを隠そうと、裏も表も同じ雪の、厚く、重い、
外がい套とうの袖を被かぶると、また青い火の影に、紫陽花の花に包ま
れま
すよう
で、且つ白羽二重の裏に薄萌黄うすもえぎがすツと透とおるようでした。

ウオオオオオ!

俄然がぜんとして耳を噛かんだのは、凄すこく可恐おそろしい、且つ力ある犬の声

でありました。

ウオオオオオ!

虎の嘯うそぶくとよりは、竜の吟ずるがごとき、凄せい烈れつ悲ひ壯そうな声であります。

ウオオオオ!

三声を続けて鳴いたと思うと……雪をかついだ、太たくく逞たくましい、しかし瘦やせた、一頭の和犬、むく犬の、耳の青竹をそいだように立ったのが、吹雪の滝を、上の峰から、一直線に飛下りたごとく思われます。たちまち私の傍そばを近々と横ぎって、左右に雪の白しろあ泡わを、ぎっと蹴けた立てて、あたかも水雷艇の荒浪を切るがごとく猛然として進みます。

あと、ものの一町ばかりは、真ま白しろな一条の路が開けました。

——雪の渦が十才ばかりぐるぐると続いて行く。……
これを反対にすると、虎杖の方へ行くのであります。

犬のその進む方は、まるで違った道でありました。が、私は夢
中で、そのあとに続いたのであります。

路は一面、びようびよう 渺々と白い野原になりました。

が、大犬の勢はいきおい衰えません。——勿論、行くあとに行くあとに
道が開けます。渦が続いて行く……

野の中空を、雪の翼を縫って、あの青い火が、うねうね 蜿々と螢のよ
うに飛んで来ました。

まつしやうめん 真正面に、おうじけい 凹字形のおおき大な建ものが、まつしろ 真正白な大軍艦のよ
うにもうろう朦朧としてあらわ顕れました。と見ると、怪し火は、何と、ツツ

ツと尾を曳ひきつつ、先へ斜ななめに飛んで、その大屋根の高い棟なる避
雷針の尖とつたん端に、ぱつと留つて、ちらちらと青く輝きます。

ウオオオオオ

鉄づくりの門の柱の、やがて平地と同じに埋うずまった真中まんなかを、
犬は山を乗るように入ります。私は坂を越すように続けました。

ドンと鳴つて、犬の頭ずつ突きに、扉あが開いた。

余りの嬉しさに、雪に一度手を支つかえて、鎮守の方を遥ようはい拜しつ
つ、建ものの、戸を入りました。

学校——中学校です。

ト、犬は廊下を、どこへ行つたか分りません。

途端に……

ぎつぎつと、あの続いた渦が、一ツずつ数万の蛾がの群ったよう
 な、一人の人の形になつて、縦隊一列に入つて来ました。雪で束つか
 ねたようですが、いずれも演習行軍よそおいの装して、真まっさき先なのは刀とうを
 取つて、ぴたりと胸にあてている。それが長靴を高く踏んでずか
 りと入る。あとから、背はいのう囊、荷にないづつ銃したのを、一隊十七人ま
 で数えました。

うろつく者には、傍わきめ目も触ふらず、肅然として廊下を長く打つて、
 通つて、広い講堂が、青白く映つて開く、そこへ堂々に入ったの
 です。

「休め——」

……と声する。

私は雪籠りの許を受けようとして、たどたどと近づきました
 が、扉のしまった中の様子を、硝子窓越がらすまどごしに、ふと見て茫然ぼうぜんと
 立ちました。

真中の卓子まんなか テエブルを囲んで、入乱れつつ椅子に掛けて、背囊も解
 かず、銃を引つけたまま、大皿よそに装った、握飯、赤飯、煮染にしめをて
 んでんに取っています。

頭かしらを振り、足ぶみをするのなぞ見えますけれども、声は籠つて
 聞えません。

——わあ——

のし
 と罵るか、笑うか、一つ大声が響いたと思うと、あの長靴なの
 が、つかつかと進んで、半月形がたの講壇に上って、ツと身を一方に

開くと、一人、真まっすぐに進んで、正面の黒板へ白墨チヨオクを手にして、何事をか記すのです、——勿論、武装のままでありました。

何にも、黒板へ躓つりません。

続いて一人、また同じ事をしました。

が、何にも黒板へ躓つりません。

十六人が十六人、同じようなことをした。最後に、肩かと頭かしらと一団いったんになったと思うと——その隊長たいさうと思うのが、衝つと面おもてを背せけました時——苛いらつように、自棄やけのように、てんでんに、一いち齊じに白墨チヨオクを投げました。雪が群ぐんって散ちるようです。

「気きをつけ。」

つと驚わしが片翼ぺんを長く開いたように、壇だんをかけて列れつが整ととのう。

「右向け、右——前へ！」

入口が背後にあるか、……吸わるるように消えました。

と思うと、忽然として、顛れて、むくと躍つて、卓子の真

んなか

中へ高く乗つた。雪を払えば咽喉白くして、茶の斑なる、畑将

軍のさながら犬獅子……

ウオオオオオ！

肩を聳そぼだて、前脚をスクと立てて、耳がその円天井へ届くか

として、嚇かつと大口を開けて、まがみは遠く黒板に呼吸を吐いた――

黒板は一面真まっしろ白な雪に変わりました。

この猛犬は、——土地ではまだ、深山にかくれて活いきている事

を信ぜられています——雪中行軍に擬して、中の河内かわちを柳ヶ瀬へ
 抜けようとした冒険に、教授が二人、某中その学生が十五人、無慙むざんに
 も凍死をしたのでした。——七年前ぜん——

雪難之碑はその記念だそうであります。

——その時、かねて校庭に養われて、嚮導きようどうに立った犬の、
 恥じて自ら殺したとも言い、しからずと言うのが——ここに顕れ
 たのであります。

一行が遭難の日は、学校に例として、食饌しょくせんを備えるそうで
 す。ちようどその夜よに当つたのです。が、同じ月、同じ夜よのその
 命日は、月が晴れても、附近の町は、宵から戸を閉じるそうです、
 真白まっしろな十七人が縦横に町を通るからだと言います——後でこれ

を聞きました。

私は眠るように、学校の廊下に倒れていました。

翌早朝、小使部屋のいろりの焚火に救われて蘇よみがえ生がえったのであります。が、いずれにも、しかも、中にも恐縮をしましたのは、汽車の厄に逢った一人にんとして、駅員、殊に駅長さんの御立おたちあ会いになつた事でありました。

大正十（一九二一）年四月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年12月4日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十一卷」岩波書店

1941（昭和16）年9月30日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2005年11月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雪霊続記

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>